名城大学　教職センター紀要
第 21 巻（2024）31 － 37 頁

実践報告

他者とのかかわりと子どもの変化
―松阪市立飯南中学校の実践を中心に―

前　田　豊　美

Relationships with others and changes in children
-Focusing on the practice of Matsusaka City Iinan Junior High School-

Toyomi Maeda

１．はじめに

筆者が松阪市教育委員会に入り、Q-U アンケートの集計やアセスメントを担当するようになり、７年の月日が経つ。当初、市内の小中学校は、学級づくりの理論が浸透しておらず、安全・安心の学級の定着がなく、学力も停滞気味で、不登校児童生徒数の増加や全国学力・学習状況調査結果が全国平均を下回るなど、課題が多い状態だった。そのため先生方は、児童生徒の対応に終始追われているように感じた。改善を模索し、不登校児童生徒支援員（Non Attendance　Support　Staff:ＮＡＳＳ）を配置したが、2020（令和２年）年度コロナが大流行し、子どもたちは、新学年の初めから、入学式や始業式、学級開きなどを普段通りに迎えることができず、学校生活では、仲間の顔をマスク越しに見、給食は黙食とされ、集団行動が大きく制限されることになった。また、学校生活を離れても、友達と集団で遊ぶ形より、ネットを通じてのゲームで関わりを持つ子どもが増えてきた。

ふりかえると、この頃から、Q-U アンケート結果に異変が表れてきたように思われる。

（１）ソーシャルスキルが身についていないと思われる児童生徒の増加
（２）学級・学校へ行きたがらない児童生徒の増加
（３）自分の意見を持つ、発表することを嫌がる児童生徒の増加
（４）満足群に位置しているのに、孤独感や無力感を感じている児童生徒の増加
（５）学級の荒れの低年齢化

このような変化に直面し、教育委員会として、子どもたちの不安を取り除き、積極的に学校生活を送れるよう、松阪市教育ビジョンにおける基本方針のひとつである『ふるさと・松阪に誇りをもち、豊かな心と自主性や社会性を備えた子どもを育てる』に基づき、「豊かな心」を育成し、「安全安心な学びの場」としての学校･学級づくりの実現に向け、次頁の取組を進めた。

いきいき学校プロジェクト（不登校児童生徒支援計画）
～すべての子どもたちが笑顔で過ごすために～
※３．いきいき学校プロジェクト（不登校児童生徒支援計画）の取組で詳細説明

２．Q-U アンケートのアセスメントから見られる児童生徒の様子

2022（令和４）年頃、小中学校を訪問し、児童生徒の様子を見ていると、教室に入れない子どもや友達に暴言を吐く子ども、廊下を徘徊する子どもや授業になると机に突っ伏して何もしない子どもなど、学校生活に適応できない子どもが以前より多く見られるようになっていた。特に小学校低学年の子どもたちは、感染症対策に加え、慣れない学校生活に戸惑っているようにも見え、実態把握が急務だった。そのため、Q-U アンケートを小学校２年生から実施した。

Table.１に示した様に、小学校低学年の子どもたちの傾向としては、「やる気のあるクラスをつくるアンケート」のうち、友達関係や学級の雰囲気などに関する質問の項目、「いごこちの良いクラスをつくるためのアンケート」での侵害行為認知に関する項目での、ネガティブチェックがつく子どもの増加が目立った。また、ソーシャルスキルを身につけていないと思われる子どもや集団の中に入れない子ども、仲間との関係をうまく処理できていない子どもの増加もわかった。そして、もう一つ大きな課題として、全学年を通して、「学級にいたくない」「学校に行きたくない」と答える傾向が増加してきたことが挙げられる。これらの原因の一つとして、コロナ禍において、就学前の段階で必要な、集団遊びや集団での約束事を守るといった経験をしてこなかったことが考えられる。また、2020（令和２）年全国的に行われた休校措置や分散登校措置、感染拡大を避けるための休校や学級閉鎖などにより、家庭内で一人または兄弟姉妹だけで過ごす子どもが増え、同年代の仲間と共有する生活時間より、ある意味自分の好きに過ごせる一人の時間に慣れてしまったのも原因ではないだろうか。これらのことは、対応が遅れると、不登校や別室登校になる子どもが増加する可能性を含むと考える。また、「自分の意見を持たない」「自分の意見を出さない、出せない」子どもも目立ち始め、就学初期段階からのソーシャルスキルの定着と安全・安心の学級づくりが急務となったと捉えている。

Table.1　Q-U 結果（2022年６月データ）

	友達関係／平均	学習意欲／平均	学級の雰囲気／平均	承認感％	侵害感％	学校を休みたいが３分の１を超える学級数
低学年	10.3/12	9.9/12	10.7/12	69.0	22.9	53〔71学級中〕
高学年	10.6/12	9.6/12	10.6/12	71.3	17.8	15〔165学級中〕
中学校	18.3/17.3	16.3/15.7	17.3/15.3	73.9	20.9	37〔120学級中〕

３．いきいき学校プロジェクト（不登校児童生徒支援計画）の取組

２の項で示した児童生徒の様子から、「今どんな支援をしていくことが大切か。児童生徒が安全・安心の教育の場で生活していく上で重要なことは何か」を考え、以下の３本柱を中心とした取組を行った。

（１）不登校児童生徒支援員（Non　Attendance　Support　Staff：ＮＡＳＳ）の配置

・在学する児童生徒に限らず、中学校卒業後も途切れない支援を行う事を目的とし、市内11校区に定期的に学校訪問をする形で配置する。

（２）「ふれあい教室」の設置及び別室対応の充実

・教育支援センターと同じような状況で通室できる「ふれあい教室」（市内３中学校校舎内）で、自分の興味があることや別室支援員（コネクトサポーター）とのかかわりを通して、外との関係性を築いていくことを目的として設営する。

・登校できるが教室に居づらい子どもたちのサポートと居場所づくりのため、コネクトサポーターという別室支援員を随時配置する。

（３）スリンプルプログラムの導入

・ソーシャルスキルと構成的エンカウンターを組み合わせた取組を導入し、かかわりのスキルアップをめざす。

４．スリンプルプログラム（名城大学曽山和彦教授が提唱）の取組

生活経験が少なく、コロナ対策によって他者とのかかわりを制限されてきた子どもたちに、①他者と関わること、②自分の思いを持ち、伝えること、③集団を通して関わる力を身につけることを目的とし、活動自体がシンプルで教師にも子どもにも負荷がかからない取組として、その効果が期待できることから導入した。

2022（令和４）年４月に、市内小中学校長会で、コロナ禍で懸念される児童生徒について説明するとともに、対応策として、全ての小中学校で「スリンプルプログラム」に取り組んでいくことが報告された。このことを受け、各校管理職と生徒指導担当を対象に、曽山教授による「子どもたちの居場所つくり」についての研修を行った。また、2022（令和４）年後期から、先進校として３中学校（飯南中学校、鎌田中学校、東部中学校）が実践を開始することになった。

３校の中で、教職員が一丸となって取り組み、早くも結果が出始めている飯南中学校の実践を紹介する。

〈松阪市立飯南中学校の取組〉

スリンプルプログラムを「いいタイム」として、毎週火曜日の朝学活で取り組んでいる。

・学校独自の「指導案」を作成する
・活動の流れの確認と教師が留意したい点をしっかり共有できるように提示する
・取組は、「どの先生がやっても、どのクラス、どのメンバーでも同じように活動ができる」を目標に、活動内容の勝手な変更をしない
・「いいタイム」を保護者や地域の方々が知り、経験することで、学校の取組の様子や人間関係づくりの意義の理解を促す
・誰とでも臆せず話ができ、自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたりする姿勢を身につけるため、小学校との交流や地域の方との交流の際にも「いいタイム」を積極的に取り入れていく

〈指導案からの抜粋〉

何も特別なことをしていただくことはありません。普段の授業の中で、ちょっとしたことを相談したり、グループで活動したり、話し合ったりすることがあると思います。その時に、「いいトークしてみよう」「いいトークのように…」と言っていただくだけです。そうすることで、子どもたちは「いいタイム」の時と同じスイッチが入ります。

今年度は、「いいタイム」と様々な活動を関連付けさせることをしていきます。すべての教員が「いいタイム」、授業の中での「いいトーク」をできるようにお願いします。松阪市内のすべての小中学校が取り組んでいます。飯南中学校が他校をリードできる存在になれるといいですね。

〈飯南中学校の生徒の声〉

○自分が意識するところは、しっかり意識できたので良かったと思う。話題で、答えた内容からさらに違う内容へ広げられたので相手のことを知れたし、楽しかった。自分のことにもふれながら話をすることができた。
○これをすることで相手の知らなかったこととかを知れるので、とても良いと思った。頷きや表情も良くて話しやすかった。
○みんなのことを今よりもっと知れることがすごくいいと思いました。この活動を続けて行けたらいいなと思った。
○友達と普段話さないようなことを喋って、話題を広げられてよかったと思った。
○話したことない人とも、喋れたのでよかったと思った。
○友達のことは、知っていることもあったけど、いいタイムを通して友達のことについてより詳しくしれたのでよかった。友達とたくさん話せて楽しかった。
○毎週いいタイムがあるので火曜日がたのしみになった。朝から笑い合って、新鮮な気持ちになった。いっつも話している友達でもしっかりはじめの挨拶をするので、親しきに仲にも礼儀ありと感じた。

〈教職員の声〉
○いいタイムのルール（あいさつ、うなづき）を毎回伝えることで、子どもたちが相手の話を聴く姿勢が身についたと思います。いいタイムがあることで、普段教室では話さない人とも話す機会が増えた。それにより
・あしやまタイムで地域の方と会話をする場面、話を聞く場面などかかわっている姿
・あしやまタイム発表会での発表する姿、質問をする姿、質問に答える姿
・他校の中学生や小学生、高校生と会話している姿
・集会での話を聞く姿勢
・道の駅コラボプロジェクトでの小学生とかかわる姿や地域の方とかかわる姿
が見られるようになった。
３年生については、横のつながりが以前に比べて強く感じられるようになり、この活動も成長を促したファクターの一つだと思った。
○授業でペア活動をする時にとても感じるのだが、相手の話をしっかり聞く、そしてつまっていたら助けることができている。今までよりもペア活動がやりやすいと感じた年だった。
○クラスでの話し合いの場面でも、自然と挨拶をするなど、聞く姿勢話す姿勢の改善が見られた。それに加え積極的に話す様子などがあり、活発な活動につながっていると感じた。

また、2023（令和５）年２月に全国へ向けての自主公開研究会（Table.２）の場では、「いいタイム」の手法を使って、地域の方とのふれあいの場を設けることが出来た。

Table.2

〈自主公開研究会〉
1　開催日時　　令和５年２月15日(水)　13時35分～16時00分
2　会　　場　　松阪市立飯南中学校　体育館
〒515-1411　松阪市飯南町粥見566　(℡ 0598-32-2010)
3　日　　程

13：00	13：35~ 13：45	13：45~ 15：00	15：00~ 15：10	15：10~ 15：20	15：25~ 15：45	15：50~ 16：00
受付 (体育館入口)	実践演習 Ⅰ	講演会	休憩	実践演習 Ⅱ	実践発表	お礼の挨拶

4　公開内容
《実践演習Ⅰ》　飯南中学校生徒による演習発表
スリンプルプログラム「いいタイム」
《講演会》　名城大学　教授　曽山　和彦　氏
「家庭・地域と共に育む関わりの力～いいタイムの取り組みから～」
《実践演習Ⅱ》　地域の方、保護者の方、参観者と飯南中学校生徒による演習「いいタイム」をみなさんと一緒に体験してみましょう。

〈地域の方々の声〉
・子どもたちとこんなに楽しく話ができて、よかった。
・世代の格差を感じていたが、飯南中学校の子どもたちは、しっかり話をし、自分達の話にも興味を持ってくれていた。それが嬉しかった。

その成果は、総合的な学習の時間を使っての「あしやまタイム」と呼ばれる飯南高校との中高連携の取組の中でも見られ、地域の方達との交流や自分たちの考えで、調べ学習・体験学習を主体的に自信を持って取り組む姿となって現れていた。

〈あしやまタイムの紹介〉
〔学習の目標〕
・地域の方との協働で郷土の自然や社会に働きかけ、自ら考え、学ぶ力を身につける。
・学習した内容をまとめて表現する力を身につける。
（プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力，人前力）

〔取組方法〕
全校生徒が**縦割り班**で、**「地域の課題」を自分たちなりに解決する**観点で学習を 1 年間通して行う。そして、それぞれのテーマ別に学習班を作る。

あしやまタイムの一年間の流れ
5 月　あしやまタイムについての説明会･講演会（オリエンテーションと探究の基本）
5 月　研究課題の検討
6 月　テーマ（縦割り班）発表と調べ学習のやり方・講演会
6 月～10月　1 年間の計画立案、班ごとに調べ学習、聞き取り調査、実習、実験など
9 月　プレゼンテーションの仕方
10月　研究のまとめ
11月　コース内発表会・文化祭発表・あしやまタイム発表会

あしやまタイムの調査や発表会は､地域の方にも協力を求めた。1 年間取り組む活動の中で、今まで知らなかった地元の産業や文化にふれながら、地域の方を相手に、対等に向き合って話す姿勢は､「いいタイム」で培われたソーシャルスキルと、自分が課題に対して頑張って取り組んできた自信に他ならないように見える。

また発表時には、校区の小学 6 年生も参加し、自分達の先輩が中学生としてしっかり発表する様子を熱心に聞いている姿が見られた。

5．まとめ

市内全域としては、2022（令和４）年度後期から取組を始めた「スリンプルプログラム」は、１年が経とうとしている。2023（令和５）年度のQ-Uアンケートには、興味深い結果が出てき始めている。先に紹介した飯南中学校のように、安全・安心の集団を作ることができ始めている学校では、授業の中でも、自分の考えを持ち、グループの仲間と共有し、再度自分の考えをまとめるといった流れが自然にできつつあり、自己肯定感も高まってきている。一方、取組の意義や大切にしたいことをきちんと確認できないまま、なおざりに取り組んだ学校は、話しやすくはなっているものの、安全・安心の場にはなっておらず、依然授業に参加している生徒は一部の子どものみとなり、他の子どもは授業の中で、黙って席に着いていることが多い。「1.はじめに」でも書いたが、この形は、子どもたちに無力感を与え、「自分が居なくても、授業は成立するし、時間は流れる」といった考えを起こさせる。また、自分で考えることをしなくなったり、他者とのかかわりを持つことが面倒になり、独りで過ごすことを好むようになったりすると推察する。

学校は、学業の場ではあるが、人とのかかわりを学習する人間教育の場でもある。そういった観点から見ると、他者とのかかわりや集団の中で必要なスキルを、いかにして早く身につけさせることができるかが、子どもの自己肯定感の高まりや自立に関係すると考える。Table.3のように、子どもたちの意欲や肯定感、疎外感は、まだまだ手放しで喜べる状態ではないが、教育現場で力を合わせ、活動に取り組む姿勢とそこで培われた力（スキル）を授業の中でどう活かすかが大切になってくるだろう。道半ばの松阪市ではあるが、子どもたちが自分の思いを言葉にし、互いに尊重しあいながら授業に臨む姿を実現したい。

Table.3（2023 6月データ）

	意欲点数	承認感点数	疎外感点数 （侵害行為認知）	学校へ行きたくない人数が学級人数の３分の１以上の学級数
小学校低 （全国平均）	32.0（30.2）	19.7（17.9）	10.3（12.3）	66〔111学級中〕
小学校高 （全国平均）	31.7（26.7）	20.5（18.7）	8.4（11.1）	14〔169学級中〕
中学校 （全国平均）	83.3（82.1）	38.6（34.8）	16.4（20.2）	49〔124学級中〕